
人間と悪魔を繋ぐ者

- 空色 -

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

人間と悪魔を繋ぐ者

【Nコード】

N4651D

【作者名】

- 空色 -

【あらすじ】

何をしても駄目な中学生レイの影が突然実体化した。さらにその影は凶悪な悪魔だった！『悪魔の囁き』という魔法を駆使し、凶悪な自分の分身と激闘を繰り広げる！！少しホラー、軽くコメディ、地味にアクションの三拍子です。 謎が多いですが、仕様です。

満月のきれいな夜。ある小さな街の暗がり、二人の人間が立っている。

「この辺りですか？」

「ええ、それと周りの被害はまだ無いみたいですよ」

「そうですか。手早く済ませたいですね。あいつをこのまま野放しにしておく、いづれはこの世界が闇に包まれた、影だけの世界になつてしまいますから」

「それに、嫌な風が吹きはじめます」

「被害が出る前に終わらせましょう」

満月が落ちて、太陽が真上を通り過ぎたところ、とある少年は中学校にいた。

「はい、ではこの文章の感想を聞かせてください。ではまずは……レイ君」

女教師はレイという少年を指した。少年は嫌々立ち上がった。

「はい、あ、えっと……あの、その」

レイは立ったままモジモジとしている。クラスの半分以上が薄笑いしている始末だ。そうこうしている内に、学校のチャイムがなつてしまった。

「仕方ありませんね。残りのものは宿題とします」

クラス内で大ブーイングが起こる。レイは小さく縮こまった。

「またレイのせいで宿題増えちゃったよ」

「こんな事誰にでもできるだろうに」

「本当役立たずだよな」

そんな声がクラス中に広がっている。

今が最後の授業だったので、レイは逃げるように学校の外に出た。

「あんな事、気にしない気にしない」

レイは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

彼の名前はレイ。勉強運動共に中の下、性格はきわめて引っこ思案。そのせいか、クラスでは軽く馬鹿にされている。

レイはため息を漏らしながら下校をする。

「ああ、僕にも何か取り柄ないのかな」

いつものごとく一言目の弱音を吐いた時だった。

「痛、何だ？」

足の先に何かが刺さったような痛みが走った。レイは足を上げて、靴の裏を見た。

「釘？」

小さな釘が靴に刺さっていた。レイは無理やり引っっこ抜いた。

「道に落ちてたのを踏んじやったかな」

そしてレイは歩き出した。

「痛！」

また足に痛みが走る。レイはまた足を上げた。

「釘が……」

次は大きめの釘が三本も刺さっていた。足自体に刺さったのは先端だけだったが、妙だ。

「な、なんでこんなに釘が」

そうレイが思ったときだった。

チャリン、チャリン、チャリン

後ろから、小さな金属部品が地面の上に落ちたような音がした。レイは少しづつ後ろを振り返る。

しかし、そこには見慣れた自分の影しかなかった。持っていた釘を捨てて、レイは再び歩き始める。

チャリン、チャリン、チャリン

今度は音と共に寒気が走った。しかしレイは歩き続けた。怖くて後ろを振り向けないのだ。その時だった。

「うわっ！」

レイは何も無いところで、派手に転んだ。しかし、何かに躓いたような感触がした。

そして、レイが打ち付けた手をなでながら、立ち上がろうとした時、気がついた。自分の影に足を捕まれている。

「何なんだ!？」

レイの影は、レイが激しく動いているのに大して、ただ立ち尽くしたまま、足を掴んでいるだけだった。

「うわああ、放せ！」

レイが叫び始めた。その時だった。影は地面から離れ、実体化した。しかし、レイなど比べ物にならないほど大きく、電話ボックスほどの大きさだった。そしてそのまま、レイの足を掴んでいとも容易く、持ち上げてしまった。さらにもう片方の手には……

「ご、五寸釘、やめろ！」

巨大な影に抵抗するレイ。しかし影はまったく動かずに、釘をレイの心臓に突き刺そうとしている。

「うわあああああ！」

レイが思い切り叫んだ。その時だった。

「痛い」

レイは頭から地面に落下した。巨大な影の手を見てみると、赤い十字架が手に刺さっている。そして、影とは反対の方向を見ると、

一人の男が立っていた。

「離れててください」

男がレイに言った。レイは一目散に男の後ろに回りこんだ。

「あらら、救影会め、随分嫌な奴を残していきましたね」

男はそう言っていると、レイの影に手をかざした。

「赤十字」

男の手から、果物ナイフほどの大きさの、赤い十字架が影に向かって飛んでいった。すると影は、寸での所でかわし、逃亡していった。

「黒式、奴を追ってくれ」

男がそう呟くと、男の影が実体化した。さらに驚いたことに、大きな猫の様な形になった。すでに黒電そのものだ。そしてその影は、レイの影の逃亡した方向に、驚くべき速度で追いかける。

「君、大丈夫ですか？」

男はレイに声をかけた。その言葉で、レイは我に返った。

「あの、あれ、あれはなんだったんですか？」

「話せば長くなりますが、あれは君の影ですよ」

「そんなことじゃありません！何で実体化したり、巨大化したり、襲ってきたりしたんですか！」

「わかりました。一つづつ話していきましょう」

男はそう言って、語り始めた。

「まず、自己紹介しましょう。私は影契師のウォド・アッシュです」

「あ、レイ……です」

「ではレイ君、解説しましょう。まず第一に影とは何か！実は影も人間と一緒に生きているんですよ」

レイはあまりに急なことで信じがたかったが、体験してしまったせいで、信じるしかなかった。

「そしてこの影っていうのは、人間が言う悪魔みたいな者ですかね」「あ、悪魔？」

「ああ、誤解しないでくださいよ。悪魔だからといって、悪事ばかりしているわけではありません。どちらかというと今は、寄生虫と言っても過言ではありませんが」

「はあ、そうなんですか」

「実はこの世の中には、もう一つの世界というのがありましてね。魔界と呼ばれています」

「魔界って事はもしかして……」

「無論、悪魔たちの世界です。そしてその魔界は、神様のイタズラなのか、この世界の光と影で構成されている、二次元の世界なんです」

「つまりは光でできる建物の影などで構成されてるわけですか」

「おお、飲み込みが早いですね。なんで悪魔が人間と動きを合わせるかはさておき、さっきの悪魔が寄生虫のようなもの、というのをご説明しましょう」

「現在は、悪魔は、この世界で言う天使に狙われているんです。悪い奴らじゃないんですけどね」

「じゃあ、なんで狙われているんですか？」

「それについては、また今度ということ。話を戻しますが、人間はなんとというか、悪霊ですかね。悪魔がいないと、悪霊に狙われてしまうんですよ」

「あ、悪霊ですか」

「正式名称は違ってますけどね。そして人間と悪魔は、お互いに助け合うことにしたのです」

「つまりは、人間が天使を、悪魔が悪霊を追い払うわけですか？」
「そういうわけです。天使は生き物を殺すことができず、悪霊は悪魔を恐れていますから」

だんだんと話がかみ合ってきたと、レイは少しワクワクしていた。
「そして、ここからが一番の本題です」

辺りの空気が重くなるのを、レイは感じた。

「近日、悪魔たちの反逆が起きたのです。普通に考えるとありえない事なんですがね」

「もはや、僕の影が暴れたしたのも……」

「無論そのせいです。悪魔はプライドが高く、人と共に生き、人と共に滅びる生き物なはずなんですよ。人を裏切るなんて、到底考えられません」

「では、一帯何が？」

「……救影会、何を考えているかわからない集団です。今回の事件も奴らが関与していると睨んでいます。そして……」

アツシュは苦虫を噛み潰したような顔をした。

「レイ君、君は自分の影と戦い、契約を結びなおさねばなりません」
「た、戦う!？」

レイの声が裏返った。しかしアツシュは話を続ける。

「悪魔はプライドの高い奴なんで、自分より弱い人間には取り付きません。なので力を証明したあとに、この書類にサインをさせてください」

アツシュはそう言うと、首にかけたかばんから、ある書類を取り出した。

「人影保護承諾書？」

「ええ、つまりは自分の影に戻らせるための書類です。悪魔はケジメが大好きで、書類を書かせないと戻ってこないんですよ。あと

「はこれをどうぞ」

アッシュは次は、薄いパンフレットのような本を取り出した。

「ん〜、懐かしいですねえ〜」

「え?」

「あ、いや何でもありません」

「あの、それよりも書いてある意味がよくわからないんですが」

「悪魔の囁き……通称魔術ですね」

「と、言いますと?」

「はい、魔術を駆使して、自分の影に力をみしてやってください」

「む、無理ですよ!運動だつて勉強だつて苦手な僕なんか……」

レイは首をぶんぶんと横に振った。そんなレイの肩に、アッシュが手を置いた。

「レイ君、戦いに行きたくない理由は多々あるでしょう。別に頼んでいるわけではありませんよ」

怖がるレイに、アッシュは優しく、そして厳しく言った。

「頼んでいるのではなく、強制です」

「嫌ああああ!」

人気のない夜道、レイは一人歩いていた。

「うう、怖いよお」

結局レイは、自分の影に契約をさせるために、影を探し始める。

「でも戦わなきゃ死んじゃうよお」

あのあと、アッシュの話の聞いていると、影はプライドが高く、主が一人で勝たねば、契約を破棄するらしい。そして、今日の十二時までに契約ができなければ、レイは悪霊に呪い殺されてしまうのだ。

「戦う手段って言ってもこれだけだし……」

レイはそう呟くと、手に持った本を見た。

結局本に書かれていた悪魔の囁きという魔術は、4つだけだった。数秒間、指定した空間を密閉状態にする『エアキューブ』自分はずり抜けられるらしい。

そして二つ目は、指定した場所に、空気中の酸素と水素で水を生成する『アクアボール』

三つ目は、家庭用電源の半分も電圧のない雷を、手から連続で放出する『ラインボルト』距離はレイの場合、十メートルが限度らしい。

そして極めつけ、百円ライターくらいの火力しかない『ドットフレイム』なぜこんな魔術を作ったのだろうか。

悪魔の囁きを使いすぎると、精神的に疲れてくるらしいので、乱発は控えると釘をさされた。

「これを乱発しないで、どう倒せと？」

運動や勉強でもお手上げなレイ、すでにこの戦いさえ戦う前からお手上げだった。そんなレイの周りに異変が起きた。

チャリン、チャリン、チャリン

レイは息を飲んだ。そして、手に持ったノコギリを構えた。そして暗がりから、奴が出てきた。しかし、昼に見たときとはまったく違っていた。まるで、赤鎧を着た般若と言った所か。アッシュいわく、昼は天使にできるだけ見つからぬように、黒く染まっているらしい。昼は天使、夜は悪魔の世界のようだ。

「ご機嫌麗しゆう、元主人よ」

「やっとできてくれたか」

すでに時刻は一二時まで三十分前、つまりレイは三十分以内に契約を成立させなければならぬのだ。

「さあ、来い」

「子供相手にいたぶる趣味はないんだが、行かせてもらおう」

その頃アツシユは、別の場所の見回りをしていた。

「ご主人、レイは大丈夫なんでしょうか？」

アツシユの影、黒式が問いかける。

「ん？ん、正直やばいかもしれませんね」

「随分正直に言いますね。でもそうでしょう。一目でわかりました」

「ええ、あの影の大きさ、雰囲気、あれは……」

『魔王』

悪魔の囁きを使いながら、必死に逃げまどうレイ、それを物ともしない、そしてレイをなぎ払うように腕を振り回す魔王。すでに時間も残っていない。

「元主人よ、逃げてばかりでは命を粗末にするだけではないか？」

「へへ、気にしない気にしない」

「……元主人よ、貴方はいつもそうだった。目の前のものから逃げ出し、悔しがりもせず、ただ苦笑いを浮かべるのみ。貴様にプライドはないのか！」

魔王は叫びながら、レイに急接近した。そして魔王の拳が、レイの腹辺りに当たった。レイは数メートル吹っ飛び、腹を押さえてかがみ込んでしまった。

「私はそれでも貴方に仕えてきた。しかし、もう限界を感じた時だ。救影会が現れ、私に自由を約束した。そう、貴方の命と引き換えに」
しかし、その時レイは、体の異変を感じた。

「殴られたせいじゃなくて、息が、苦しい」

レイはふと思ひ、時計を見た。針は一二時三分を示していた。

「元主人よ、逃げ続けていたつきが回ってきたようだな」

「逃げて、なんかないさ、期を待って、たんた」

息を荒くしながら、レイが言った。そして、何か咳き始めた。それを見た魔王が

「貴方のいい訳には毎度毎度がつかりさせられる。まさか死ぬときまでもそのような事を」

「エアキューブ！」

透明の四角形は、魔王を囲んだ。しかし魔王はただにやけているだけ。

「何をするかと思えばこんなもの」

「アクアボール！」

エアキューブの中に水がたまっていく。

「ほう、我慢比べでもする気か。どちらが先に窒息するか、結果が目に見えているなあ」

「ラインボルト！」

レイは水のとまったエアキューブに向かって、ラインボルトを連続で撃ち込んだ。

「うぐあああ！」

魔王もさすがに絶えられないようだ。しかし、水が化学変化を起こし、無くなっていく。そして、半分ほどになった所で、レイはラインボルトを止めた。しかし、魔王は余裕で立っている。

「最後の悪あがきか、なんと醜い」

「いや、計算、通り、だ」

「この期に及んでまだそんな事を……」

「ドット、フレイム！」

レイはエアキューブに向かって、火の粉を飛ばした。

「何だその炎は、元主人よ、つくづくかわいそうな人だ」

火の粉が魔王に迫っていく。

「これで、終わり、だ」

火の粉はなんと、エアキューブに燃え移り、巨大な爆発を起こし

た。

水が状態変化し、酸素と水素に分かれたのだ。そして、酸素は引火性、水素は有爆性が高いのだ。

「ぐおおあああああ！」

悪魔の叫びが、辺りにこだまする。

爆発が収まり、レイは最後の力を振り絞り、倒れている魔王の首にノコギリを突きつけた。魔王はそんなレイをジッと見ている。するとレイはポケットから書類を出した。

「契約、を、してく、れ」

そういい終わると、レイは倒れこんでしまった。紫色の気体が、レイの口に流れ込もうとした時だ。

その気体は、魔王の手によって引き裂かれた。

「契約成立だ、我が主人よ」

数年後

「うわあああ！」

少年の叫び声がある。

「また奴らか？」

「そのようだ、我が主よ」

男は叫び声のした方向へ走り出す。

「ラインボルト！」

男は少年を襲う悪魔に閃光をあびせた。すると影は金切り声を出しながら逃げ出した。

「追え、魔王、見失わない程度にな」

「承知」

「君、大丈夫か？」

男の声で、少年は我に帰った。

「あの、あれ、あれはなんだったんですか？」

「話せば長くなるが、あれは君の影だ」

「そんなことじゃありません！何で実体化したり、巨大化したり、襲ってきたりしたんですか！」

男は何か、懐かしい気持ちを抱きながら語り始めた。

「嫌あああああ！」

- Endless -

(後書き)

最後まで読んでいただいて、ありがとうございます！)・・・；
(よくわからない面も多々あるかと思えます。

今回の作品は、あえてたくさん謎を残しました(ヤメロ
謎の多い作品って、書く側としては、種を明かす時がすごい快感
なんです、あえて溜め込みました；；

なんかこのままシリーズ物にできそうかなあ、とか書いてる途中
思っちゃったり；；まずはトドラッグアームズ+ (連載中小説) が
三章ぐらいまで終わってからですね。

とりあえず、ネタバレはする予定です)・・・(いい感じの
評価もらえたら明かさずにシリーズ化しちゃったり(ナイダロ

それはおいといて、本当にお読みいただき、ありがとうございますま
した！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4651d/>

人間と悪魔を繋ぐ者

2008年11月7日08時08分発行